

## 詩篇 83 篇

## 0 歌。アサフの賛歌

## 《同盟敵国》

- 1 神よ。沈黙を続けしないでください。黙っていないでください。神よ。じっとしていないでください。
- 2 今、あなたの敵どもが立ち騒ぎ、あなたを憎む者どもが頭をもたげています。
- 3 彼らは、あなたの民に対して悪賢いばかりごとを巡らし、あなたのかくまわれる者たちに悪だくみをしてしています。
- 4 彼らは言っています。「さあ、彼らの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしよう。」
- 5 彼らは心を一つにして悪だくみをし、あなたに逆らって、契約を結んでいます。
- 6 それは、エドムの天幕の者たちとイシュマエル人、モアブとハガル人、
- 7 ゲバルとアモン、それにアマレク、ツロの住民といっしょにペリシテもです。
- 8 アッシリヤもまた、彼らにくみし、彼らはロトの子らの腕となりました。セラ

## 《戦いの想起》

- 9 どうか彼らを、ミデヤンや、キシオン川でのシセラとヤビンのようにしてください。
- 10 彼らは、エン・ドルで滅ぼされ、土地の肥やしとなりました。
- 11 彼らの貴族らを、オレブとゼエブのように、彼らの君主らをみな、ゼバフとツアルムナのようにしてください。
- 12 彼らは言っています。「神の牧場をわれわれのものとしよう。」

## 《呪いととりなし》

- 13 わが神よ。彼らを吹きころがされる枯れあざみのように、風の前、わらのようにしてください。
- 14 林を燃やす火のように、山々を焼き尽くす炎のように、
- 15 そのように、あなたのはやてで、彼らを追い、あなたのあらしで彼らを恐れおののかせてください。
- 16 彼らの顔を恥で満たしてください。【主】よ。彼らがあなたの御名を慕い求めるようにしてください。
- 17 彼らが恥を見、いつまでも恐れおののきますように。彼らがはずかしめを受け、滅びますように。
- 18 こうして彼らが知りますように。その名、【主】であるあなただけが、全地の上にありますいと高き方であることを。

73篇から続いてきた「アサフ詩篇」も今日で最後になります。83篇はイスラエル存亡の危機を思わせる内容であり、周辺諸国の名前が次々と登場します。ここには11の国名が出てきますが、諸国が同盟を結んでイスラエルに四方から攻め入ろうとしているイメージで書かれています。これに近い出来事として、Ⅱ歴代20章に描かれている南ユダ王国のヨシャパテ王の時代にモアブ人とアモン人が同盟を結んで海の向こうから攻め込んできたという記事が取り上げられることがあります。敬虔な王ヨシャパテは民全体に断食を布告し、決死の祈りによって、武力を一切用いずにこの戦いに勝利しました。しかし、詩篇83篇の同盟敵国のスケールははるかに大きく、旧約聖書にはそれほどの大戦については書かれておりません。そこで解釈が必要になりますが、これらの国々というのはおそらく、イスラエルが長い歴史の中で戦い続けた諸国の総括と捉えるのがふさわしいでしょう。アブラハム契約まで遡って見ますと、神はアブラハムに次のように予告しておられました。

わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。(創世15:18-21)

エジプトでの滞在の後、イスラエルはカナンの地に帰還しますが、そこから繰り広げられていく先住民との戦いは一世代で終わることなく、イスラエルは常に戦火に晒されながらその歴史を形成していきます。よって、この詩篇は神の民の異教諸国との戦い全般を詠ったものと理解することができるでしょう。

6～8節に出てくる国々(民族)を見てまいりましょう。

- ・ **エドム**……ヤコブの兄エサウを祖とする民(血縁)。南東。
- ・ **イシュマエル人**……イサクの腹違いの兄を祖とする民(血縁)。南東。
- ・ **モアブ**……アブラハムの甥ロトを祖とする民(血縁)。東。
- ・ **ハガル人**……ヨルダンの東に住む遊牧民。
- ・ **ゲバル**……死海の南の民。
- ・ **アモン**……アブラハムの甥ロトを祖とする民(血縁)。東。
- ・ **アマレク**……イスラエルがエジプトを出て最初に戦った民。南。
- ・ **ツロ**……地中海沿岸の民。北西。
- ・ **ペリシテ**……地中海沿岸の民。南西。
- ・ **アッシリヤ**……北イスラエル王国を滅ぼした大帝国。北。
- ・ **ロトの子ら**……モアブ、アモンの別名。

以上のように、詩人はイスラエルを取り囲む諸国の民が円陣を組んで攻め込んでくるイメージで語っています。時間的な前後はあれ、イスラエルはどこかでこれらの民との戦いを繰り広げてきたということでしょう。

9～11節では、士師記の時代に神がなされた救いの御業が思い起こされています。「ミデヤンや、キシオン川でのシセラとヤビンのように」とは、イスラエルがカナンの王ヤビンの支配下に置かれたときにその將軍シセラをヤエルという女性が討ったという出来事です(士師4～5章)。また、「オレブとゼエブ」とはギデオンによって殺されたミデヤン人の二人の首長(士師7～8章)、「ゼバフとツアルムナ」も同じくギデオンによって殺されたミデヤン人の二人の王です(士師8章)。詩篇ではよく過去の戦いが思い起こされ、同様の御業がなされることが祈り求められます。12節には、彼らが語っている冒瀆的な言葉が残されています。「**神の牧場をわれわれのものにしよう**」とは、単にイスラエルの土地を領土として欲しがっているに留まらず、その土地に臨在される「主なる神」への挑戦であることを意味します。「神よ、こんなことを言われて黙っていないでください!」との訴えです。

13節以下では、「**枯れあざみ……風の前のわら……火のように……はやて(疾風)……あらし**」と、直ちに消えていく脆いものが次々と挙げられていきますが、敵がそのように瞬く間に滅ぼされることが望まれています。ところが、ここで不意に出てくる宣教的な祈りに読者は目を留める必要があるでしょう。「**彼らがあなたの御名を慕い求めるようにしてください**」(16節)、「**こうして彼らが知りますように。その名、【主】であるあなただけが、全地の上にありますいと高き方であることを**」(18節)と、敵する者たちがまことの神を知るようになることを求めているのです。詩人の本当の思いはここにあると言えましょう。戦争によって敵に打ち勝つことも神の御業ではありますが、最善の道は彼らが偶像礼拝を捨てて唯一まことの神に心を向けることであると。

この祈りから教えられることは、私たちが自分を憎む者に直面するとき、どのように祈ればよいかです。その人への復讐を神の御手に委ねるといふ道もあるでしょう。しかし、信仰の行き着くところは、迫害する者のために祈ることであり、その人の神との関係が正しいものとなることなのです。

アサフの祈りは、世界規模の宣教の広がりの可能性を秘めています。新約聖書の二つの聖句をもって終わらしましょう。

それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「**イエス・キリストは主である**」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリピ2:10-11)

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。(黙示録1:7)